

---

# 悪魔といっしょ！

HALO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔といっしょ！

### 【Nコード】

N7608A

### 【作者名】

HALO

### 【あらすじ】

時は西暦20XX年。一人の少年と、一体の悪魔。そして、少年を取り巻く愉快的仲間達が織り成すちよつと不思議なお話。

## プロローグ

時は西暦20XX年。

ここ日本は霊たちで溢れ返っていた……。

「ふわあ……。」

こうして今日も目覚めた俺、岩崎悠いわさき ゆうは高校生になったばかり。

ちなみに、先日両親が仕事の都合だかなんだかで海外へ出かけたばかりだ。おそらく、今までもそうだったようにあと数年は帰らないだろう。……母さんもいなくなるというのは流石に予想外だったが。

制服に着替え、ドアノブを回し、部屋を出る。

まったく。うちの親も少しは子供の心配をしてほしいものだ。

俺はいいが、義妹は……料理とか、家事全般あまりよく出来ていないだろうに。

階段を降り、食卓へ向かう。…焦げたトーストの匂いがした。

「おはよー……。」

「おはよう、兄さん。」

テーブルの上を見る。

「……これを食べ、」

「食べて。」

俺がいい終える前に速答。それが俺の義妹、岩崎理奈いわさき りなの特技である。

椅子に座り、目の前にあるおそらく食べ物であろうものを凝視する。

「……何か不満？」

とりあえず一口食べてみよう。

そして、食べてみて答えを出すまでにあまり時間は掛からなかった。

「……やっぱこれからは俺が作るわ。」

自分で言うのもなんだが、俺は家事全般全て上手くやれる。

「つまり、私の料理は食べられないと。」

「あぁっ！？ もうそろそろ行かないと時間、」

「……マテマテマテ、兄さん。」

ゾツとして振り返ると、不適な笑顔をうかべている理奈の顔があった。

「時計見て？ ……ほら、まだまだ時間はたぁーっぷりあるよ？」

「……………」

まずったな、と思った。俺はおそらく次に来るであろう怒りの言葉に備えて身構えた。

そして、意地悪そうだった理奈の顔が優しいものへと変わる。

……あれ？

「兄さん……。これから料理当番よろしくね？ 私、こんな不味い料理食べたくない……。」

自分でも自覚していたんだ……。うん、してるだけ良いことだ。

「……わーっただよ。」

そうして、俺たちは学校に向かったんだ。

俺たちは高校に入学してから数日が経っている。つまり

「兄さんは部活どうするの？」

「うーん……とりあえず今日、部室をいろいろ見て回ろうかな。」

「今はどの部活・同好会・サークルに入るかとても悩んでいるところなのだ。」

「弓道部とかは？ 兄さん、集中力すごいし。」

「左目が開かないんだぞ？ 弓道では致命的なんじゃないか？」

そう。俺は生まれたときから左目が開いてなかったのだ。そして今も。

「あー、確かに。」

凄い偏見かもしれないけどな。

「ユウ。200m程先に霊気を感じる。」

「ん、わかったよ、ギル。」

こうして俺に話し掛けてきたのは、飼い猫のギルガメッシュ。

最初は普通のアメリカンショートヘアの猫だったのにな……。何？

化け猫ってでも言うのかな。とにかくそんな感じ。外見は普通に猫だな。

「ギルさん。あの、学校までついてくるのは……。」

ギルはさつきからずつと俺たちの横をトコトコ歩いている。

「別に問題はないだろう？」

「はあ……兄さんも兄さんです。」

「俺の所為なのか！？」

少しはギルを止めてやれ、とでも言いたいのだろうか。

そんなことを話していると、ギルの予測した地点の近くまできていた。誰が幽霊かは気配で分かる……。あの女の人だ。

「おはようございます。」

俺のその言葉に少数の人が不思議そうにこっちを見たが、大多数は別に気にした様子はなかった。そう、今では霊が見えない人のほうが少ないという時代になってきているのだ。

「……おはようございます。」

女の霊も俺に返事を返す。

「……“お困りですか？”」

俺のこの言葉、実は深い意味がある。今のこの時代には、送霊師と呼ばれる霊を正しき場所　つまり、天国とか地獄だな　に送る者がいて、実は俺もそれだったりする。そして、そこでは霊に依頼が必要かどうか尋ねるとき

「お困りですか？」

と聞くのだ。つまり、この言葉は業界用語（？）ってやつだ。

でも、タダで行うわけにはいかない。よほどの馬鹿でもないかぎり、依頼料はとる。俺の場合、自分の守護霊になってもらうという依頼料。とは言っても、交替で見守られているという表現が相応しいだろうけどさ。

「いえ……結構です。」

女の霊はそれだけ言うと、俺たちを通り過ぎた。

「また、お化けとお話してたの？」

そういえば、こいつは見えない人なんだったな。

「ああ、そうだよ。」

暫らくそうして歩いていくうちに、学校が見えてきた。

## プロローグ（後書き）

まだまだダメな点が多いとは思いますが、長い目で見て下さると嬉しいです。

## 第1話 出会い、唐突に

退屈な授業も終わり、放課後となった今。俺たちは部活や同好会、サークルを見て回ったわけだが……。

「……帰宅部でもいいかな。」

特に入りたいものは無かった。

「私は……。」

理奈が何か言おうとしたとき、数人の女子が走ってきた。

……なるほど。理奈は友達と一緒に、か。

「ごめん！ 兄さん、私は……。」

「早く行け。友は大事にしろよ！」

その時、理奈が何か驚いたような顔をしたが、理由は分からなかった。

理奈もいなくなりどうするか悩んでいたところ、ギルが話し掛けてきた。

「ユウ。お前、まだ行ってないところがあるぞ。」

そう言っつて、一つのドアに目を向ける。そして、俺はそのドアに掛かっているプレートを読んだ。

「……心霊・オカルト系統術研究会？」

そして、その下には貼り紙があり、そこには、“能力者以外は入会お断わり！”と、何だか可愛い字で書かれていた。……能力者？

「まあ入ってみろ。」

特に反論は無かったので、俺はとりあえず部屋に入ってみた。

ガチャ……。

「失礼しまーす……。」

私こと、春日亜希かすが あきは悩んでいた。何故なら、私が二年生になつて立ち上げたサークルに誰も入らないからだ。

「はあ〜……。やっぱりアレはまずかつたかなあ……。。」

“アレ”というのは、部屋のドアに張つた貼り紙のこと。

「能力者なんて、霊がいつぱいいるこの時代でもなかなかいるもんじゃないからなあ……。。」

とにかく、人を集めないと……。まずい。このサークルが無くなってしまう。

……。と、そんなことを思つてはいても、人間というのは危機がすぐそこにまで迫つてこないと実感できないものだから。

「これで良いかな……。？」

私は悪魔召喚の儀式をしていた。

「魔法陣……。マジックトライアングルはこれで問題ないし……。うん。大丈夫だ。」

思えば、それが間違いだった。悪魔を召喚なんてしてはいけなかったのだ。

「あつてあつてっ……！」

「うわっ！」

俺が部屋に入った途端、可愛らしい女の子が飛び出してきた。そして、何を思ったのか俺にこんなことを言ってきた。

「君、入会希望の生徒？　だよな、そうだよね。じゃあまず部屋に入って待っててよ。私、少し空けなきゃいけないからさ。」

早口で言いながら、俺の背を押して部屋に入れる。

「え、ちよっ……………」

ドアが閉まり、部屋に閉じ込められる俺。開けようとドアノブを回すが、どういっわけか開かなかった。

「…………マジ？」

「どっやらマジっばいな。うん…………！？　ユウ、あれを見る！」

どうやら俺と一緒にこの部屋に入ったらしいギルは、何やら俺に叫んだ。そして、ギルの言った方向を見るとそこには、

「…………コスプレイヤー？」

いや、しかし…………。今の時代に悪魔のコスプレするやつなんかいるか？

「違う。ユウ、こいつは本物の悪魔だ。」

まあ確かにそうかもしれない。髪の毛も、目の色もなんだか違うみたいだし。

「悪魔、か…………。でも、すげえ可愛くないか？」

聞いた時、思いがけない人から返事が返ってきた。

「…………ありがとう。で、私を召喚したのはあんたよね」

さっきまで三角形の魔法陣っばいやつの上に少し浮いて目を閉じていた女の子…………悪魔だった。

「で、何の用なの？　アレだったら…………うん、まあいいかな。あんな、能力者みたいだし。」

彼女が何を言っているのか分からない。いや、言語は分かるさ。多分、召喚された時に瞬時にこの世界に適応したのだから。

…………あれ？何故俺はこんなことを知っている？

「…………で、な・ん・の・よ・う・な・の・!?？」

少々怒り気味に悪魔が俺に聞いた。

「いや、別に用は……。」

「はあっ!? じゃあ、用も無いのに私を呼んだの!?!」

「まあそういうことになるかな。」

何も考えずに言ったこの言葉がまずかった。見ると、ギルは「やってしまったか」というような表情で俺を見ていた。

「はあ……。でも、ちゃんと私を呼び出したことの対価は払ってもらうよ。」

ギルがテレパシーで話し掛けてきた。「悪魔だから、甘くて安い対価だと思うなよ」と。怖いよ……。

「対価は何にしようかな……。よし! 決めた!」

そして次の瞬間、やはり悪魔だと思わせる発言をこいつはしやがった。

「私の命令を10回聞くこと!」

魔法陣から抜け出し、俺の前で仁王立ちするこの悪魔。一体どうしたものかと考えたところ1.43秒で原因を突き止め、そこから解決策もすぐに出た。そして俺は思った。

……あの女あああっ!

## 第2話 契約の指輪

彼に悪いことをしたとは思っている。名も知らない彼、ありがとう。まさか“あの”悪魔が召喚されるとは思ってた。なかった。

私が呼ぶはずだったのは、もっと低クラスの悪魔。“あの”悪魔ではない。きつと今頃彼は……。いや、考えないことにしよう。彼をあ部屋に開閉魔法（“クローズ”）を使ったのは間違いなく私だ。いや、私以外に出来るわけが無い。

そんな彼に面倒ごとを押し付けた私だから、彼を心配するというのは何か間違っている。私がすべきことはきつと……。彼に謝ること。

「私の命令を10回聞くこと！」

悪魔の命令なんて一体どんなものなのか……。そんなことを考えていると、いつの間にか右手の薬指にごく一般的な指輪に見えるものがはめられていた。

「……これは何？」

それに答えたのは悪魔ではなくギルだった。

「それはコントラクト・リング……。契約の指輪、だな。外そうとするなよ。死ぬから。」

「……なかなか賢い使い魔みたいね。そう、その通りよ。そしてこの指輪をはめられた者は、はめた者の命令に絶対従わなくてはならない。それにしてもその使い、」

「こいつは使い魔じゃない。俺のペットだ。」

さっき言おうとしたことを今言ってみる。そして、これを期

に少し反撃してみることにした。

「第一、なんで俺が悪魔なんかの言うこと、」

「レンよ。」

多くは語らなかったが、そのレンという言葉が悪魔の名なのだろうと思った。

「……レンの言うこと、」

「レン様。」

「レン様の……。」

あれ？ 何だか俺、言い包められてないか……？

「様はおかしいだろ。」

自分に言い聞かせるように小さく呟く。

「とにかく……、」

……あれ？ 俺は何を言おうと思ったんだ？

「とにかく、こいつは使い魔なんかじゃなく、俺のペットの猫なんだよ。」

一度言い掛けた以上ちゃんと言わなければと思い、出てきた言葉はそれだった。

「はいはい、分かったから。とにかくこの部屋から出るわよ。」

「いや、それが……開かないんだよ、ドアが。」

俺がそう言うと、レンはドアに向かった。

「開閉魔法……クローズの方がかかってるわね。」

そう言うと、レンはドアノブを軽く人差し指で叩いた。

「さ、行くわよ。」

レンがドアノブを回す。

するとさっきまで開かなかったドアが簡単に開いてしまった。

さて……私は彼に謝らなければならぬ。しかし、それは私が召喚した悪魔が本当に“それ”だった場合のみだ。だから私には確かめる必要がある！

……というわけで、私はドアに耳をつけ聞き耳を立てていた。その光景はきつと普通に見れば異様なものだっただろう。

暫らくそうしていると、あの悪魔が自分の名前を言ったのが聞こえた。

「やっぱり……。桃色の悪魔、レンか。」

桃色の悪魔、という名前の由来として基本的にはあの桃色の長くて微妙に毛先がくるんとした髪の毛からきているらしい。聞いたところによると、瞳の色も桃色だとかそうでないとか。

ちなみに、悪魔という尻尾があったり羽があったりという、よくアニメとかにあったようなものを考える人もいるだろうけど、このレンは違う。人間そっくり……いや、ほぼ完全に人間なのだ。

ならば、どこが人間じゃないのか？ それはやはり、詠唱無しで使える魔法やら何やらがあることだろう。可愛いふりしてあの悪魔、わりとやるもんだねと思わず感心したくなる。

そんなことを考えていると、唐突に部屋のドアが開いた。そこから出てきたのは、黒いローブに身を包んだレンともう一人。普通の顔立ち、少し茶色掛かった髪、何よりその左目の傷から、間違いない確実に絶対的に彼だということを私は認識した。そして、彼は私を見つめるなりいきなりこう言ってきた。

「この責任、どうやってとってくれんだよっ!？」

言いながら、彼は自分の右手を私に見せてきた。

「コントラクト・リング……。」

ここまで話が進んでいては私は何も出来ない。はてさてどうしたものかと私は苦悩した。

ドアを開けるとそこにはショートカットの、微妙にウェーブした髪の毛。右手に何らかの印がある、眼鏡を掛けた女生徒。多分間違いない。あの女だ。

俺は文句を目一杯言っただろうと考えていたが、実際には一つの言葉しか思い浮かんでこなかった。

「この責任、どうやってとってくれるんだよっ!？」

怒鳴り、右手を女生徒に見せ付ける。

「コントラクト・リング……。」

もうその時の俺はどうかしていた。何でこいつがこの指輪のことを知ってるかなんて考えもしなかった。

「分かったわ。私の身代わりになってくれたわけだし、責任とってあげる。ただ……。」

何か交換条件でもあるのだろうか?……卑怯だが、言うことを聞くほかあるまい。

「ただ、このサークルに入会するのが条件よ。」

……俺は入会届にサインをした。

### 第3話 集い始める、仲間(前編)

とりあえず、その日は家に帰ることにした。もちろん、レンも一緒に。

「災難だな。」

隣を歩くギルのその言葉はどうにもこの状況を面白がっているようにしか思えなかった。

「小さいけど、やっぱりこいつケルベロスなんじゃ、」

「だから、使い魔じゃないと何度言えば、」

その時気付いた。明らかにレンは目立っている。そりゃ、こんな変な格好なんだもの。

「早く帰らせてえ……。」

レンは不思議そうな顔をして俺に聞いた。

「だから今こうして帰っているんじゃない？」

俺は大きく溜息を一つ吐いた。

ところで、俺は亜紀さんに宿題を用意されていた。それは、

“能力者を最低一人部員に加える”というものだった。幸い一人だけ心当たりがいた。三年の柏木浩樹<sup>かしわぎ ひろき</sup>だ。浩樹とはちよいと前に色々あったのだが……それは今はおそらく関係の無い話。

とにかく、彼は魔人間という能力者。もう話をつけてあるから宿題は終了。早くお家に帰って眠りましょうねー、だ。学校の宿題とかは知らねー。

何より、今の俺にとっては隣でこの街を物珍しそうな目で見て歩くピンクの災難を取り除くことが先なのだ。

そして、やっと家の前まで来たところで気付いた。

理奈にどう説明しようか……。

「ほら、入会届。」

そう言っただけは私に紙を渡した。

「ありがとう。それと……ごめんなさい！ 君をこんな事態に巻き込んでしまった……。本当にごめ、」

「い、いいよ、そこまで謝らなくて……。ちゃんと責任とってくれらるんだよね？ それなら別に……。」

彼は女の子のこういふ必死で謝る姿とかに弱いのだろうか？

なら、きつと将来は女に振り回されるのだろうか……。いや、尻に敷かれる、かな？

「ええ。責任を持って君の契約の解除方法を調べるわ。」

その時、レンが明らかに何か反応した。恐らく、レンは解除方法を知っているのだろう。しかし、言わないということはこの状況を楽しんでいる、ということなのか。

「ところで、自己紹介でもしたらどう？」

意外にも、レンの発言だった。

「そうだな。成り行きとはいえ、入会するわけだし。」

「それじゃ私から。私は二年の春日亜紀よ。」

「俺は一年の岩崎悠。で、こいつが、」

そう言っただけ、悠君は隣にいた猫を抱き上げた。

……ふむ。毛並みも良いし、毛艶もなかなか。かなり可愛がられてるのだろうか。

「にゃー。」

「えっと……。やっぱり気にしないで下さい。」

やはりそうだろう。猫を紹介するなんて、よほどの猫好きでもない限り非常識だ。しかし、悠君の場合はそうだったものとは少し違ったもののような気がしたのだが。

「私はレン。あんたたちの見方で言えば、私はユウと同じ年齢よ。そして、クラスはツエーン。属性は、」

「待て待て！ クラスとか属性とかわけ分からん！」

「これで伝わらないの？ 全く、この星の文化レベルは一体、」  
「お前のとこの文化レベルが気になるよ！」

呆れつつ悠君は溜息を吐いていた。

「じゃ、自己紹介も済んだとこで……。悠君、宿題をだしていいかな？」

「……はい？」

「能力者を最低一人、このサークルに入会させてほしいの。あ、能力者ってのはレンに聞けば分かると思うわ。じゃ、よろしくー。」

正直、我ながら勝手な奴だと自虐してしまう。私って非道い奴だな……。

悠君は嫌そうな顔はしていたが、取り敢えず引き受けてくれるようだった。

その後解散すると、悠君はレンを連れて廊下の向こう側に行った。よく見ると、三年の男子生徒と何か話をしているようだった。「さて、私も帰るかな。」

そう思った矢先、女生徒が私に話し掛けてきた。タイの色を見るかぎり、おそらく一年生だろう。

「すいません！ ここに、こーんな髪型した一年の女子いませんでした？」

言つと、彼女は自分の髪を上げ、指を髪留め代わりにするよううにして探している女子の髪型を表現しているようだった。

「ごめんなさい。知らないわ。」

「そうですか……。すいませんでした！」

立ち去るうとする彼女を私は引き止めた。

「待って！ 貴女…部活とか入ってる？」

「はひ？ まだ決めてないですけど……。」

「なら、私のサークルに入って！ …… 貴女も能力者なんでしょ？」

「ッ！？」

彼女は何も言わなかったが、その動揺の仕方が全てを物語っていた。

「名前は？」

「……宝月智ほづつきともです。」

何も言わず、私は入会届を差し出す。

「その力、このサークルで役立ててみない？」

第3話 集い始める、仲間へ前編（後書き）

評価していただけるとやる気が出てくるので、もしよろしければ評価をお願いします。

#### 第4話 集い始める、仲間(中編)

彼女はすぐに入会届にサインをしてくれた。

「はい、どうも。ところで智……あ、呼び捨てでいい？」

「別にいいですよ。」

「ありがとう。で、智の探してる人っていうのは誰なの？」

「あ、はい。岩崎理奈って言います。」

岩崎………ということは、悠君に関係ある人のことだろうか？

そう思い、私は聞いてみた。

「ところで智、岩崎悠って人のこと知ってる？」

「あ………。ゆ、悠さんですか？ 知ってます、理奈ちゃんのお兄さんですよ。」

成程、そうなのかと一人で納得していると、今度は智の方から質問された。

「あの、………なんでそんなことを聞くんです？」

「ああ、悠君はこの会員なの。だから、少し知りたくてね。」

「そ、そうなんですか！？ 悠さん、いるんですか！？」

激しく問いただす智に、私は少し驚いた。何か理由があるのだろうか？

もしそうだとしたら一体何なのだろう。もしかして、智は………

「悠君のこと、嫌いななの？」

「や、ややや、そーんなこと、無い、ですよ………お。」

どうやら相当嫌いなのだろうか。顔を真っ赤にして激しく否定している。首まで振っているため、智のその肩にまで届く程度に伸びたその髪も激しく横に揺れていた。

そして、語尾に力が無かったのはきつと、あまり強く否定するとかえって怪しまれると、その時になって思ったからだろう。

………しかし、会員が集まらなければサークルは無くなってし

まう。智、嫌でも我慢してほしい……。

「……入会届は返せないからね。」

「ふえ？ 何言ってるんですか。むしろ私、絶対に入ってる！  
って思ってるぐらいなんですけど……。」

何故だろう？ 確かに智はさつきよりも入会することに意欲的のようにみえる。

「……ま、理由なんて分からなくてもいいか。あ、そうそう……これは出来たらでいいんだけど、他に能力者を知ってたらこのサークルに紹介してほしいの。」

「わっかりました！ 明日連れてきまーっす！ ……あ、活動は明日からですよね？」

「ええ、そうよ。」

「うーん、楽しみだなーっ！ じゃ、さようならー。」

そう言うと、智は走り去って行ってしまった。

しかし、悠君といい智といい……今思えば、何故誰もこのサークルの活動内容を聞こうとしないのだろうか？

「ただいまー。」

そう言った俺の声には、たぶん元気が無かったと思う。

「おかえり兄さ、」

「こ、この子はレンっていうんだ。」

あれこれ聞かれる前にと、取り敢えず先に答えておく。

「彼女は留学生、」

「悪魔よ。」

とてもナイスな俺の嘘が、レンのその一言で打ち砕かれる。

言ってしまった以上、もう誤魔化しがきかない。俺は理奈に全部話すことにした。

「なーんだ。じゃあいいんじゃない？ 家事全般は兄さんがやるんだしさ。寝る部屋は……兄さんと一緒に寝ればいいだろうし。」

「どうやら、俺の義妹は悪魔だろうが何だろうが関係ないそうだ。おまけに、寝る部屋と一緒にすればいいと言う。理奈は俺にそんな度胸が無いと決めてかかってきてるな。まあ、実際無いんだけど。」

「お金はどうするんだよ。」

「腹が減ったな。理奈！」

「それがね、なんか今日、怪しい人たちが来てこんなのを渡してきたの。ギルさん、いつものでいいですか？」

「ああ。大盛りで頼む。」

理奈からズッシリと重いカバンが渡される。理奈はその後、飯を催促するギルのもとへと向かっていった。

「その怪しい人っての、多分だけど悪魔協会の人たちね。異世界へやってきた悪魔達の生活を全面的にバックアップしてくれるの。」

「じゃあ何だったんだ？ このカバンの中身は、」

札束だった。それも、信じられないくらいの量だ。

「すげえ……。でも、こんなあったら経済にも何か影響が無いかな？」

「大丈夫よ。世のお金持ちから少しずつ拝借してきたお金だから。」

「……このお金を使っても良いのだろうか？ そんなことを思ってしまう。」

そして俺は夕食を三人分作り三人で食べ、風呂に入り。その

後は自室に籠もっていた。レンは理奈と一緒に風呂に入ったらしい。

俺の自室にキーボードを打つ音が響く。

「そろそろ寝るか。」

電源を切り、寝ようとした時に俺の部屋のドアが開く。レンだ。

レンは部屋に入ると俺のベッドへ一直線。そのままボタン、おやすみなさい、だ。

「ちよつと待て、レン。」

「呼び捨て。」

「じゃあ、レンちゃんって呼べば良いか？」

「……………気持ち悪いからそれは止めて。」

これぞ俺の作戦。これで呼び捨てで呼んでもいいわけだ！  
……………じゃなくて。

「俺はどこで寝ればいいんだ!？」

「どっかって……………ベッドで寝れば良いじゃない？」

……………つまりそれは、俺がレンと一緒に寝るといっわけ。俺だつて一応男なわけで。

俺は床に布団を敷き、そこに寝ることにした。……………布団があつて本当によかった。ビバ布団！ ……古いな。

その日、俺は悶々とした夜を過ごした。

#### 第4話 集い始める、仲間へ中編（後書き）

ダメな部分は、できればコメントをつけて具体的にかいていただくとありがたいです。

## 第5話 集い始める、仲間(後編)

翌日、いつものように朝を迎えた俺たち。朝食を食べ、学校へと向かう。そして、いつものようにHRが始まる。そう、ここまではいつもどおりだったのだ。

「えー、転校生を紹介する。」

井上先生の言う転校生というのが誰なのかは分かっていた。

俺の隣の空いている机が憎い。

「入ってきなさい。」

先生のその言葉を合図に、教室の扉が音を立てて開く。

「それでは自己紹介を。」

俺は転校生を視界に捉えた。間違いなく……レンだ。

「レンよ。どうぞよろしく。」

「それじゃあ岩崎の隣……あの席が君の席だ。」

そう言われ、レンはこちらへ飛んで(宙に浮く、という表現の方が正しいかも知れない)きた。

「ああ、そういえばレンさんは悪魔だそうです。でもみなさん、悪魔だからっていじめたりしてはいけません。みんなで仲良く接してあげてくださいね。」

教室全体に

「はい」

という言葉が響き渡った。

……ちょっと待て。レンは悪魔なんだぞ？　なんでみんな気にならない！？　こんな展開、どこぞの小説ぐらいにしか無いっての！

「よろしく。」

「おい、いくら私服OKだからって、その服装は……。」

相変わらずレンは黒いローブを身に纏っていた。スカートも黒かった。だから、ローブの下に着ている白いワイシャツ(あれ…

…俺のか？)のような服が引き立ち、

「やらしい目で見ないで。」

「ごめん。」

……じゃなくって。もっと聞くべきことがあるだろ、俺！

言えよ、俺。聞けよ、俺！

「……………じゃなくって！ 何でみんなあんなにあっさりと納得す、

」

「岩崎君、静かにしなさい！」

「あ、す、すみません……………」

しかし、あれだけで意味が通じたのか、レンはボソリと独り言のように呟いた。

「魔法。」

……魔法、ねえ。

確かに、それだけで説明するのは簡単すぎる。しかし、いくら霊が普通に見える時代がきたからって、それと魔法が普通に使えるのとはワケが違う。

この嶺山町みねやまちょうは特殊な町ではない。むしろ、この町はどちらかといえば田舎であり、それこそこんな魔法とかそういうものとかは無縁なものだと思ってきた。だから、

……いや、もう考えるのは止めよう。何だかんだ言ってもきつと俺は、今のこの状況を認めたくないだけなのだ。

「何で認めたくないんだ？」

それは小さな疑問。しかし、それでいて大きな意味をもつ。

「何を認めたくないって？」

どうやら口に出してしまっていたらしい。小声でレンが聞いてくる。

「この状況、この現実をさ。」

「第六感ってやつじゃない？ ただなんとなくそう感じるだけよ。」

「そう……………かもな。」

深く考えたってすぐには出ない答え。第六感という言葉だけ

で済ませてしまう自分に嫌気がさした。

そして授業が終わり、今日からはサークル活動があるので昨日行ったあの部屋へ向かう。

部屋には、様々な箇所を傷を負ったゴツイ体格で柄の悪そうな……って、あいつは浩樹か。それと、浩樹とは対照的におとなしそうで、小柄で童顔の奴がいた。

「よう、浩樹。」

「おつ、悠か。……ってか、俺一応先輩なんだがな。」

ちゃんと先輩のように慕え、ってことだろうか？

「何を今更。」

「だな。俺たちはこんな感じが一番良い。」

俺のそのわずかな言葉の意味を汲み取ったのか、浩樹は俺の望む返事を返した。

「ところで……あなたは？」

さつきから気になっていた男子生徒に声をかける。

「僕は二年の宝月竜二（ほうづき りゅうじ）。なんか、妹に無理矢理入るように言われちゃって……。ところで、君は噂の岩崎悠君だよな？」

「そうですねけど……何故俺の名前を？」

「だって、悪魔と契約してるんでしょ？ そりゃ、僕も興味持つよ。」

一瞬、

「なんで知ってたんだ？」

と思っただが、二年に亜紀さんがいることを考えれば納得できる。

「……悪魔ってそんなに珍しいの？」

横から小声で聞いてくるレン。

「うん。珍しいどころか、普通はいないと思う。」

「全く、この星の文化レベルは一体どうなってるんだか。」

今回はあえてツツコミを入れなかった。

そして、それから五分と経たずに他の人たちもこの部屋に集まってきた。

しかし、俺と面識の無い人が二人……。いや、一人は何処かで見かけたことがある気がする。

「悠さんっ！」

桜の花びらをかたどった髪飾り（ヘアピン）……髪留め？ あ

ーっ！ 女のことなんかよく知らねーよ！）をした、ポニーテールでとてもサラサラしていそうな髪をした女の子が俺の名前を呼んだ。

「こうして悠さんと同じサークルに入れるなんて、光栄です！」

「は、はあ……。」

こいつは誰だ？ どっかで見たことが……。

「あれ？ 智は悠君のことが嫌いだったんじゃない……。」

「え？ やーだな〜！ そんなわけじゃないですかあ！ むしろ好きっていうか……。わっ、わっ！ やーだな〜私ったら、何言ってるんだか！ ……てへへ。」

「悠。あんた、この人間と知り合い？」

「……記憶に無いな。」

レンの質問に俺は素直に答えた。

もしかしたらギルなら知っているかも知れないが、生憎と今日は付いてきていない。

そんなことを思っていると、男のほうで俺に話し掛けてくる。

「彼女、たぶん君の妹……理奈ちゃんの友達だよ」

そう言った男の容姿は、よく言う美少年という言葉が相応しかった。そういったところを本人が気にしていないあたりが格好いいのだろうか。……じゃなくて。

「何でそんなことを知ってるんですか？」

「いろいろあって、ね。」

その“いろいろ”が激しく気になったが、あえて俺は聞こうとはしなかった。

「俺は三年の高梨隼人<sup>たかなし はやと</sup>。君は……。桃色の悪魔を連れてるってことは悠君だよな。」

……俺ってばそんなに有名なのだろうか？

「えー……ごほん！」

唐突に亜紀さんが自分に注目を向けさせるかのようにわざとらしく咳をした。

「いきなりですが今夜、ある場所にある廃工場へ向かいます。みなさん、今夜8時に嶺山町駅前に集合すること。以上、連絡終わりではい解散！」

……あっけねえ！ もう終わりデスカ！？

しかも、

集まっただけ言われて何やるか聞いてないし！

周りを見ると、他の人たちはもう帰っていた。

「ほら、帰るわよ。」

レンに手を引かれ、俺も帰宅する。

そして、約束の8時となった。

第5話 集い始める、仲間へ後編（後書き）

次回から少し変わったお話になるかも知れませんが、長い目で見てやってください！

あと、評価をどうかお願いします。

自分ではやはり気付けない部分が多々あるので、良い評価であれ悪い評価であれお待ちしております！

## 第6話 冷酷電腦少女（前編）

「で、こんな所まで来て何を？」

今いる場所はとある廃工場。巷では悪霊スポットとかで騒がれてるらしい。昔はこういう場所を心霊スポットとか言ったらしいな。まあ、今となつちや何処でも心霊スポットだ。悪霊スポット、というのはあまり多くないが。

「決まってるわ。調査よ、ちょ・う・さ・さ。」

亜紀さんは一体何を調査しようというのだろうか？

「噂によれば、俺たちと同じくらいの歳の女子が“ある”らしいな。」

俺は浩樹の“ある”という言葉に疑問を抱いた。普通、“いる”ではないだろうか？ そこらへんに何かあるのかも知れない。「うう……暗いよ。」

竜二さんが弱気な発言をする。確かに懐中電灯の灯りしかないが、その発言はどうだろう？ 俺より年上の男として問題があると思う。

「はあ……。こんな兄を持つと妹は大変だよ。」

本当にその通りだ。智に同情してやりたい。

「……ん？ あれは……。」

隼人さんがある地点に光を向ける。

「何かあるんですか？」

「……隠し扉、かな。」

驚いた。隼人さんがこんなに凄い人だったということにでもあるが、一番はこんな工場に隠し扉なんてものがあることだ。

「地下に続いているみたいね。ほんじゃ、れつつらごー！」

好奇心からか、楽しそうにしている亜紀さんを先頭に、俺たちは地下へと続く階段を降りていった。

それから少し道なりに進むと、大きな部屋に出た。

「うへえ、こいつぁ……。」

「うわぁ……おっきいなぁ。」

思わず、浩樹も智もこの部屋の広さに驚いていたようだ。

闇に吸い込まれるように心細い光となる懐中電灯の灯り。それがこの部屋の広さを物語っていた。

しかし、凄いののは部屋の広さだけじゃない。

「凄い……こんなに凄いスパコンが……。」

部屋を懐中電灯で照らしてみると、あちこちにスーパーコンピユータがあることに気付く。何かを研究していたのだろうか？

そう思いながら見渡すと、部屋の一角にベッドのような物があり、そこに一人の少女が横たわっていた。みんな好奇心というものを抑えきれないのか、彼女へと近づいて行く。もちろん俺も。

近くで見ると、彼女の特徴がよく分かった。体格は小柄で、髪は色素が薄くショートヘア。可愛い綺麗かって聞かれたら、可愛いほうに入ると思う。

そんなことを考えていると、彼女は唐突に目を開き起き上がった。

「……多数の生命反応確認。早急に対処の必要性有り。」

彼女がいきなり起き上がったことにみんなが驚く。しかし、驚いている暇など無かった。

言った瞬間、彼女は目にも止まらぬ速さで移動し、竜二さんと智、そして隼人さんの頸部に手刀を打った。

それは一瞬の出来事だったため、何故竜二さんと智が倒れていて隼人さんがうずくまっているのか理解するのに少し時間が掛かった。

「……三名の戦闘不能を確認。残り三名、そしてアンノウンに対して攻撃活動を開始。」

危ない、逃げる逃げるにげるにげるニゲロニゲロ。

俺の頭の中で警報が鳴り響き、恐怖が込み上げてくる。

「ファイア、ファイア、ファイア！」

亜紀さんがいきなりそう叫ぶと、炎が三つ現われ彼女を襲う。

その炎は、よくゲームに出てくるようなもので、結構な迫力があつた。

「やった……！？」

「それは無いな。奴に攻撃を読まれていた。なんでわざわざ自分の手を読まれるようなことを？」

確かに浩樹の言う通りだ。何故亜紀さんはわざわざ……？

「それが魔法使いの弱点、詠唱よ。」

レンが言うにはどうやらそういうことらしい。詠唱ってのはもつと長つたらしいものかと思つたんだが、そういうものではなく相手に自分の次の手を読まれるということが詠唱というものなのか。

「ごうごうと燃える炎の中に黒い人影が見える。……亜紀さん、智とか竜二さんとか隼人さんのことも考えて攻撃してくれよ。」

「魔法使いか……。消化システム、作動。同時にサイレント展開。」  
ここは廃工場だったはず。それなのに天井からは大量の水が雨のように降ってくる。スプリングラー？ そんなものは無いはず。

そんなものに気をとられていると、彼女の体に異変が起こる。腕・脚の表面の一部がガシャリと音を立ててスライドして外れ、外れた箇所から薄っぺらいスピーカーのようなものが出てきた。

「……五秒の沈黙。」

そして、スピーカーのようなものからは何だかよくわからない、超音波のような音を出した。

その音が鳴ってから、異変が起こり始めた。

声が、出ない。

これはおそらく亜紀さんの魔法を封じるためのものだろう。つまり、次に狙われるのは……。

「ッ!？」

「……五秒が過ぎ、沈黙が終わる。」

そう言うと、彼女の体は元に戻った。

それと同時に、何かが倒れる音がする。

「亜紀さんっ!」

彼女の攻撃は速い……おそらく、俺はもう逃げられないだろう。

戦うしかない……!

## 第7話 冷酷電腦少女(後編)

「残り二名、アンノウン一体。」

次は誰を狙う？ 危険度でいえば浩樹か？

「悠。俺はアレを使うぞ。」

そう言うと、浩樹は自分の顔に手を当て、こう言った。

「魔人間化！」

「……魔人間最大の弱点は、変化する瞬間。」

まさに浩樹が魔人間化するその瞬間、他のみんなと同じように頸部に手刀を打ち、気絶させる。

浩樹、格好悪いぜ……。

しかし、そんなことを考えている暇は無い。

「残り一名、アンノウン一体。」

…さつきから気付いていたことだが、もしかして彼女にはレンのことをよく分かっていない……？

「レン。」

「言いたいことは分かるわ。詠唱無しで魔法を使えるお前なら結構楽にあいつを倒せるんじゃない？ とか言いたいんでしょ。生憎だけど、今の私は上級魔法どころか、ろくな攻撃魔法も使えない。それ以外の……そうね、補助魔法とか特殊魔法とか防御魔法・回復魔法なら使えるけど、あいつの反応速度の速さ、状況適応能力の高さから考えてこれらの魔法はほぼ無意味よ。」

「無駄話をする余裕がある……？ 相当な実力者と見た。アンノウンに目標設定、攻撃開始。」

「……アンノウンって私？」

「だろーよ。……来るぜ！」

相も変わらず目にも止まらぬ速さで移動し、レンを狙う。

するとレンは、

「契約実行。私を守りなさい、悠！」

レンがそう言った途端、俺の体は勝手に動きだす。指輪は光り輝き、かなりの熱を持っているような気もする。

「……！？ 一体何？」

思わず彼女の動きも止まったようだ。

「レンはぜってー俺が守る！」

何だこれ？ これじゃまるで死ぬ気で頑張ってる奴じゃねーかよ。別にそんなことも思っていないのにそんな力をも引き起こさせる。

それがこのコントラクト・リングの力か？

「アンノウンの従者か？ ……まあいい。こちらから戦闘不能にしよう。」

彼女は俺に狙いを定めてきた。

「霊装！」

とりあえずある程度防御を強くしよう。

この霊装という力は、本来ならば送霊の儀を行う場合にもしも悪霊が襲い掛かってきても大丈夫なようにする力だ。

自らの霊気を溢れださせ、体をコーティング。本来なら霊的攻撃を防ぐための手段のだが、まあ肉体攻撃にもある程度は効力を及ぼすだろう。

唐突に彼女が視界内に入った。そして、俺の右横を通り過ぎる。

反射的に俺は前へと走りだした。

「流石に何度も当たりはしない、か。」

先程俺が居た真後ろの所で彼女は言う。

「逃げてばかりでは勝てない……こっちからもいかせてもらう。霊手刀！」

俺の手が白い光に包まれ、どうやらそれは俺の意志により伸縮できるようだ。

「うおおおおっ！」

伸びろ、伸びろ、伸びろ！

片手の白い光だけでも、それは人一人分程度の長さがあった。その白い光をまさに手と一体化した刀のように駆使する。

しかし、彼女の動きは早く、いくらこちらの武器の攻撃範囲が大きいとはいえ全く当たらない。

「……なかなか私を楽しませてくれるな。モード2へ移行する。」  
モード2？ 一体何が起こるんだ？

「ハンドウェポンチェンジ、ソード。」  
そう言うと、彼女の右手が鋭い刃物……ある程度の長さを持った剣のようなものへと変形する。

やばいぞ、これは殺されてもおかしくない。

逃げたい……心ではそう思っているが、体は言うことを聞かない。そして彼女が動きだす。俺はあつという間に彼女を見失った。

どこだ？ どこから来る？ 後ろに気配を感じ、方向転換をすると同時に間合いを離す。

「その白い光を放つ、手から生えた剣のような武器。君の霊力……いや、霊そのものの集合体か？」

「生憎だが、俺もよく分からないで使ってるんでね。聞かれたって説明のしようが無い。」

「まあいい。その実体を持たぬ手刀と私の実体を持つ手刀……どちらが上か試そうではないか。」

今更になってレンが欠伸をしながらこちらを見ていることに腹が立つてくる。

しかし、そんな文句を言う前に手刀と手刀の鏢迫り合いが始まる。もう分かっているとは思うが、もちろんあつちは真剣で、こちらは霊的な剣である。しかし今まで互角に渡り合えているということを考えれば、この霊的な、実体の無い剣とは言えども決して威力がゼロなわけではなく、むしろ実体のある真剣と同程度の威力があると考えていいだろう。

そうして暫らく俺と彼女との真剣勝負は続いた。

戦いの終焉は唐突に訪れた。彼女が不意に間合いを狭めてきたのだ。

「これで終わり。」

やられた、と思った。

「やはりそうか。君は左目が見えないのか。まあ、開いてないということから考えて当たり前に分かることだが。」

彼女は、間合いを狭めた後に、すぐに俺の“左側”に向かってきたのだ。

左目の見えない俺にとっては、どうしても死角となる部分を、彼女は狙った。

「出来れば君を、殺したくはないのだが。」

冷たい何かが頬に当たる。赤い滴が一滴、俺の頬をつうと流れる。これなら気絶のほう良かった。レンが変に命令したからこうなったんだ。

レンを心の中で責めていた時、不意に声が聞こえた。

「佐藤さん、やめてよお！」

彼女……佐藤さんの動きが止まる。逃げようと思えば逃げられたが、俺は逃げることはしなかった。

「渡辺さん……。私は、渡辺さんを守るために、」

「この人たちは悪い人じゃないよ、多分！」  
多分、ですか。そうですね。まあ確かに怪しい面子もいますものね。

閉ざされたドアの向こうからやってきた、渡辺さんを見る。かなり小柄な人で、その容姿は某巨大掲示板ジャンルスレの……ではなく、学校の噂で聞いていた特徴と酷似していた。いや、その噂を聞く以前から俺は渡辺さんを知っていた。

「大丈夫で……あれ、悠君!？」

「お久しぶりです、渡辺さん。1、2年ぶりですかね。噂は聞いてましたけど、高校ではまだ会ってませんから。」

「悠……君が、悠か。渡辺さん、戻っていて。ああ、大丈夫。この人たちの命は保証するから。」

「え？ う、うん。」

そうして渡辺さんは再び閉ざされたドアの向こうへと消える。

「さて……悠。私は君に興味を持った。私も君の通う高校へ明日から転入する。」

「来てどうするんだよ。」

「私は渡辺さんを守るために存在する。それ故に、今の渡辺さんが失っている本来の渡辺さん以外の人間は排除するつもりだったのだが、悠と渡辺さんを見て考えが少し変わりかけている。だが、まだ決定的ではない。」

「だから高校に行つて人間を観察しようってか。」

「その通り。では、また明日会おう。」

そう言うつと佐藤さんは風のように去っていった。

「レン。お前、こうなることを分かってたな？」

「あんたの戦闘能力を測るためよ。許しなさい。まあ、そのために一回命令しちゃったのは痛いわね！。」

……まあいい。もうレンを責める気も無い。

レンの魔法でみんなの気絶を回復させ、事の一部始終を話し各自自宅へと帰った。

翌日、俺はいつもと変わらない朝を迎えることができた。

## 第8話 変わり始める、世界（前書き）

今回の話では、一応主人公である岩崎悠が最後の方に少ししか出てきません。

しかし話の関連性はとてもあるので、どうか不思議がらずに読んでやってください。

## 第8話 変わり始める、世界

「おっ、ここだここだ。」

晃君が指を差した場所は俗に言う悪霊スポットと呼ばれている病院だ。

「ね、ねえ。やっぱり止めない？ もしも憑かれちゃったりしたら僕……。」

「はははっ！ 雅人はチキンボーイだな！」

語尾にWが五つぐらい付くんじやないかと思うぐらい加治君が笑う。

「悪霊なんていたって、被ってもらえばいいだけだろ？」

確かに浩二君の言うことは正しいと思う。殺されるわけじゃないもんね。お被いしてもらえばいいだけだもんね。それに、ある程度は抵抗できるように特殊加工のお守りもあるし……うん、大丈夫！

「よし！ それじゃあ行くぞー！」

そう言った加治君の後に続いて、僕達は

「おーっ！」

と言った。

「やっぱり夏は肝試しだよなー。」

僕以外のみんなはとても楽しそうだ。僕もこの状況を楽しめればいいんだけど……。

「なあ。俺に提案があるんだが……。」

浩二君の足が止まり、みんなの足も止まる。廊下はシンと静まり返った。

「ジャンケンで負けた奴がこの先に一人で行って、近くの部屋の中の写真を撮ってくるっていうゲームなんだが……。」

「ちよ、それすげー面白そうじゃね？」

晃君が簡単に浩二君の話に乗ってしまう。

「やめやめ。雅人が行けるわけないだろ。」

どうやら、加治君は僕を助けてくれるみたいだ。

「んー……そうだな。なら、仕方ないか。」

「ま、チキンボーイだしな！」

そう言つて晃君が僕の背中を強く叩く。

「や、やめてよ……。」

「しかあーし！ この俺、榎本加治としてはこの場を盛り上げたい！ つまり、そのゲーム、俺がやるぜえ！」

加治君はそう言つと、浩二君からカメラを引つたくつて廊下を走つていった。

「うは、流石は加治だぜ！」

……おかしい。何かがおかしい。

それが何か考えてみる。……足音だ！ 足音が加治君の以外にもある！

「ね、ねえみんな、足音……！」

「だいじょぶだいじょぶ。あいつは大丈夫だつて。それに、憑かれたら被えばいいだけだろ？」

確かにそうなのだが、何というか……直感的に、何故か危ないよな気がした。

「おーい、写真撮ってきたぞー！」

「おつ、加治！ 流石だ、」

晃君だけでなく、僕も浩二君も言葉を失った。

「んー？ おいみんな、どうしたんだよ？」

「う、後ろ……。」

僕のその言葉に反応して加治君は後ろを向く。

「やつべ、憑かれたか。まあ被つてもらえばだいじょ、」  
それに続く加治君の言葉は無かった。

ムシャムシャと“何か”を食べる音がする。その“何か”を僕は認めたく無かった。

「う、う、うわあああああああつ！」

これが人間の出せる声なのかと思うほどに尋常でない声を上げ、僕達は逃げ出した。

……もはや人間の形相をしていない“何か”に喰われている加治君を見捨てて。

あれからどれぐらい経っただろう。夢中で逃げ出していた僕達に知るすべは無い。

そうして走ってきて、やっと僕達は入口に辿り着いた。

「こんなところ、早く出よう！」

言い出しっぺはお前だろ、と心の中で浩二君を軽く責める。

何とかして僕達はドアを開けようとした。しかし、ドアは開かなかった。

「くそつ！ こんな時に霊障かよ！」

霊障と言うのは、その名の通り霊による障害のこと。そういえば、体に傷とか、腕が動かないとかつていう症状も霊障のうちに入るときがあるらしい。それほど、悪霊の力は強いのだ。

「早くしないと、俺たちも加治みたいに……！」

その時、僕は気付いた。

……なんで悪霊が、実体のある僕達に攻撃できる？

考えれば考えるほど、おかしな話だ。

「仕方ない、窓を割ろう！」

浩二君は自分の拳を窓に向けて放った。

しかし、ガツンという威勢の良い音がするばかりで割れる気配が全く無い。

「くそつ、どうなってるんだよ!？」

不意にグチャツという音がした。

音のした方を見ると、そこには顔や足・手の皮膚が爛れた、とても人間とは思えない“何か”がいた。



なつた。

「……では、次のニュースです。昨夜嶺山町にて、悪霊スポットとして有名な某病院で中学生の少年四名の遺体が発見されました。彼らは体の一部が無くなっていたり、内部を抉りだされていたり……。」

「うわっ、この町でこんな事件が起こったのかよ。危な……。」

危ないなあ。俺はそう思ったただけだったし、次に続くはずの言葉もそれのはずだった。

何故“危ない”の一言で済ませることができる？

自分の住む町でこんな残虐な事件が起こったのだ。本来ならばもっと危機感を持つべきなのではないか？

人間というのは本当に愚かな存在だ。自分にも、周りの奴にも嫌気がさす。

「悠？ 一体どうしたの？」

「えっ、ああ……何でもない。何でもないんだ……。」

何でもないわけ無かった。今の俺はとてつもない憎悪感と共に、次は我が身かも知れないという底知れない不安で押し潰されそうだった。

「兄さん、渡辺さんそろそろ待ってるんじゃない？」

「え、もうそんな時間かよ。」

慌てて登校の支度をする俺とレン。ついでに言うと、今日はギルも付いてくるらしい。

そして、用意が済むと玄関のドアの前でいつもの挨拶。

「理奈、いつてきまーす。」

「行ってくるわね。」

「行ってくるぞ。」

「行ってらっしゃい、兄さん、レンさん、ギルさん。」

これが最後の挨拶とならないように……。そう願わずにはいられ

なかった。

「おはよー、悠くーん」

しかし、そんな不安も渡辺さんを見ると軽減されてしまう。

俺は自分の内の不安を覗かれないように、自然に挨拶を返した。

「おはよ、渡辺さん。」

## 第9話 それは遠く、されど近い惨劇

「しかし、亜紀さんも人使いが荒いですよねー。」

渡辺さんに問い掛ける。こんな一日中寝て暮らせる時期なんて夏休みか冬休みぐらいしかないのだから、登校なんて勘弁してほしい。

「あはははは……。」

苦笑いの渡辺さん。きつと、彼女も俺と同じことを考えているだろう。

「いいじゃないの。家でぐうたら過ごしてるよりかはよっぽどマシじゃない。」

「確かにレンの言う通りだ。怠情に過ごすよりはよほどマシだな。

どうせお前のことだから、理奈みたいに勉強をすることもないだろうっ？」

「ぐう……。」

「あ、あははは……。」

渡辺さんはただただ苦笑するばかりであった。

そして、暫らく雑談をすると学校に辿り着き、俺の素晴らしき高校生活が大いに狂ってしまったことの始まりであるあの部屋に入った。

「おっ、悠君、渡辺さん。それにレンも、おっはよー。」

「おっはよー、じゃないですよ亜紀さん。俺としてはこの素晴らしき夏の長期休暇を、」

「怠情に過ごすはずだった、とかかな？ 悠君。」

「隼人さん、あなたはエスパーですか。」

そんなに俺の行動パターンというのは単純なのだろうか。

「そんなことはないわ。人間の行動というのは不確定要素が多いか

ら。」

「佐藤さん、心の声を読まないでください。」

「心の声を読まれるほど、悠は単純なんだな。まあ、前から知ってたことだが。」

何故だろう？ 浩樹にそれを言われると非常に腹が立つな。

「あれれ？ 宝月兄妹がいないよ？」

よく見れば渡辺さんの言う通りで、二人ともいなかった。

「あのねえ……。いい？ 宝月家っていつたら、ここいらじゃ結構大きな家でしょ？」

渡辺さんは年上なのに、まるで子供に語り掛けるような話し方で亜紀さんが言った。

そして、先程亜紀さんが言ったことに對し、俺はこう問い掛けた。「神社じゃないですか？ 家は結構普通、」

「ちつがーう！ 大きな家ってのは、物の例えっていうか、そんな感じなので、大きな力というか、権力とかを持つ家のことを言うのーっ！」

成程。言われてみれば確かにその通りだ。よく、店（霊関係のしかないけど）の看板に宝月って文字を見かけるし、この町の夏祭りとかそういうイベント系も主催が宝月って名字だよな。

「それでどうにも、あの二人の家系が本家らしくてな。ほら、もうすぐ祭りがあるだろ？ その準備で忙しいんだと。」

浩樹が言う分には、どうにもそういうことらしい。

「ところで、今回呼んだ理由だけ……。みんな、今朝のニュースは見た？」

亜紀さんのその問いにレンが答えた。

「中学生男児四人の……。殺人事件？」

その言葉を聞いた途端、浩樹の顔が曇る。何故かは分からなかった。

「そう、その通りよ。」

「それと呼んだ理由と何の関係が？」

隼人さんの言うことはもつともだ。あの殺人事件と呼ばれた理由が繋がらない。

「確かに、一見すると全く関係が無いように思うでしょうね。でもそれは、このサークル名が言えれば分かると思うわ。」

「……心霊・オカルト系統術研究会？」

いつか俺が言った言葉。その言葉を一語一句違わずに再び言う。しかし、自分の言ったその言葉で少し気付く。

「成程。あの殺人事件は人間の犯した犯罪じゃないと……そう亜紀は考えているのか。」

どうやら佐藤さんも同じことを考えていたらしく、俺が言おうとしたことを言ってくれる。

「まさか！　じゃあ、悪霊が殺したってのかよ！？　あいつらは俺たちみたいな実体を持つ者には触れられないはずだし、もし誰かが悪霊に憑かれて周りの人たちを殺したとしても……あの死に方は無いだろう！？　だからあの事件に悪霊が関係してるはずが無い！」

浩樹が抑えていた気持ちをぶちまけるかのように叫ぶ。

「いえ、佐藤さんの思っている通り、この事件は人間の起こしたものじゃない。……実体を持った悪霊によるものよ。どういう理由かは知らないけど、最近そんな悪霊が増えてるみたいなの。」

「信じられるか、そんな話！」

「……おかしい。浩樹がここまで感情的になっているところは初めて見る。」

「ど、どうしたんだよ、浩樹……？」

流星におかしいと思ったのか、隼人さんが浩樹に問い掛ける。

「死んだんだよ、あの事件で！」

「誰が、だよ。」

隼人さんは、急かすように浩樹の次の言葉を促した。

「あの四人の中には雅人が……俺の弟がいたんだよおっ！」

聞いた途端に、不安には思っていたがどこか遠くの出来事と楽観視していたあの惨殺事件が一気に身近なものとなる。

浩樹の弟が……死んだ？

「俺とは違って、あいつはおとなしかった！俺とは違って、あいつはちゃんとした人間だった！あいつには、あいつには！」

「ちよつとうるさいわよ魔人間！」

レンは詠唱を必要としないので、果たしてその言葉によるものなのか魔法によるものなのかは分からないが、どうやら浩樹は冷静さを取り戻したようだった。

そして、暫しの沈黙が流れ、浩樹が唐突に一言呟いた。

「……葬儀に行つてやりたい。」

浩樹がボソリと呟いたこの一言の願い。俺はそれが叶わない願いであることを知っている。……魔人間というのは、それほど忌み嫌われる存在なのだ。

だから、浩樹は自らの名字を……家を捨て、能力者たちが集まる協会（？）のようなところで育てられているらしい。柏木という名字は、単なる飾りでしかないのだ。

「ははは。……無理なのは自分が一番分かってる。だから俺は、せめて犯人を……。なのに、なんで、人間じゃないんだよ……このやるせない想いは、どこに……、」

「簡単じゃないの。悪霊にぶつければいいのよ。通常、霊のように実体を持たないものは実体のあるものに触れられない。でも、今回は霊が実体を持つてるらしいじゃない。理論上、魔人間であるあなたの馬鹿力を霊にくらわせることは可能のはずよ。」

さも簡単そうにレンが言つてのけた。

「……確かに、レンの言う通りね。なら、悪霊退治といきましょうか。」

亜紀さんから突然の提案。それは簡単に……いや、強引に行われることになった。でも、俺は行きたくなかった。

何故かとても、嫌な予感がするのだ。

## 第10話 突入

「そういえば、隼人さんは何の能力者なんですか？」

自転車を漕ぎ、病院へと向かわせながら俺は隼人さんに言った。

「俺？ 俺は送霊師さ。」

「あ、隼人さんも送霊師だったんですか。」

共通点を見付け、少し嬉しくなる。もちろん、喜んでいる場合でないことはよく理解しているのだが。

ちなみに、他のみんなは俺たち二人より少し後ろの辺りに付いてきている。

「さて、悠。みんながいないから聞くけど……その猫、本当は話せるんだろ？」

チラツと俺の自転車のカゴを見て隼人さんが俺に問い掛ける。その問いに答えたのは俺ではなくギルだった。

「我の声が聞こえるのか。」

隼人さんは少し驚いたような顔をした後、口を開いた。

「そりゃ、聞こえるさ。俺だって、普通の人と比べればそこそこ霊力を持つているからな。」

暫らくギルについて話をしていると、いつの間にか例の病院に到着していた。

「どう？ 気配は感じる？」

亜紀さんは俺と隼人さんに病院内にいる霊の気配を探るように言った。しかし……

「……ダメだな。」

「やっぱり……隼人さんもそうですか。ギルも俺もダメです。」

「ギルって……その猫？」

亜紀さんが不思議そうに俺たちに聞いてきた。

「猫の話はいい。……何がダメなの？」

「俺も聞きたいな。まさか、ここまで来て逃げようなんて言わないよな？」

佐藤さんと浩樹が俺たちにその理由を問う。

「気配が大きすぎて、霊達の細かな居場所……いや、大雑把な居場所すら把握できない。」

「この病院そのものが巨大な霊そのものって感じで……すみません、亜紀さん。」

俺と隼人さんがそう言うと、亜紀さんはうーんと唸ってからこう言った。

「仕方ないか。それじゃあ、二手に分かれましょう。」

「あれれー？ どうして二手に分かれるの？」

「解せないわね。私にも教えてほしいわ。」

俺も……いや、この場の誰もが気になっていたであろうことを渡辺さんとレンが尋ねてくれる。

「みなでまとまっていた方が本当は安全なんだろうけどね。でも、それでは私たちの気配がどうしても大きくなってしまふ。そうなれば悪霊達は一ヶ所にまとまって来てしまふ。」

「成程。敵を分散させ、尚且つ自分達も分散する為気配が小さくなり、見つかりにくくなると。そういう魂胆か。」

このように重大な事態がある場合、浩樹はまるで人が変わったかのようになる。物事を正確に理解するスピードが格段に上がるのだ。「魂胆って……。まあ、そういうことになるわ。」

亜紀さんは、浩樹が“魂胆”という言葉を使ったことに対して小さく文句を言ったが、特に誰も気に留めなかった。

そして暫くすると特に話すべきことも無くなり、沈黙が訪れるのは至極当たり前のことだった。

七人の少年少女たちが輪になって座っている、静かすぎるこの場にひぐらしの鳴き声が聞こえた。その声で、もう夜が近いことを再

確認させられる。

「夜になると厄介よ。早く行きましよう。」

レンが言うことは尤もだが、まだメンバーを決めていないのだ。それを決めるまでは行くこうにも行けないだろう。

「私は渡辺さんの護衛をしなければならぬ。だから、私は渡辺さんと同じチームに。」

「うわあ……。佐藤さん、ありがとう！」

「私は悠と同じチームがいいわ。そのほうがやりやすいし。」

渡辺さん、佐藤さん。そしてレンの意見を聞き、何を考えたのか。亜紀さんは唐突にこう言った。

「じゃ、チーム編成は決定ね。」

「ん？ どういうのになったんだ？」

浩樹のその疑問に、亜紀さんはこう答えた。

「隼人さんを筆頭として、私と浩樹さんで構成された“なんともバランスがとれてる”チーム。」

「遠・近・特殊（魔法）攻撃……。まあ、確かにバランスはとれてるかな。でも、そのネーミングは……。」

俺も隼人さんと同じ意見だ。そのまんますぎるネーミングだな……。

「いいんです。んで、悠君を筆頭として、レン・渡辺さん・佐藤さんで構成された……。」

一旦そこで区切り、亜紀さんはにこやかな顔でこう言った。

「ハーレムチーム。」

「は、ハーレムって……。」

「実際、そうじゃないかな？」

あはははと隼人さんが笑い飛ばした。

「というか、なんで俺がリーダーなんですか！」

「送霊師だから決まってるじゃない。送霊師がいないと、悪霊に実体があったところで完全には倒せないし。」

「成程。そんな重要な役だからこそ、俺たちを筆頭にチームを……。」

「さあて。もうこの話はいいわね？ それじゃ、私たちは正面から。悠君たちは裏口からね。」

そう言って、亜紀さんは俺たちに向こう側へ向かうように指示した。

そういえば、正面入口のちょうど反対側辺りに壁が壊れてる部分があったっけ……。

「中央に結構大きな中庭があるわ。そこで落ち合いましょう。」

それだけ言っと、亜紀さん達は廃病院の中へと消えていった。

「じゃ、俺たちも行くか。」

……しかし、裏口に辿り着くまでの距離はとても長く、入る前から結構な体力を消耗してしまったのは言うまでもない。

## 第10話 突入（後書き）

お盆でいろいろと忙しく、更新が遅れてしまいました。申し訳ありません。

あと、これからも少し更新が遅れがちになるかもしれません。

ああ、夏休みが終わってしまう……。

## 第11話 交戦開始

「これからどうするの、悠。」

「分からないか？ 一つ一つの気配も分からない程に霊がいるってことは、必ずどこかにこの病院一帯の霊達を率いてるのがいるんだ。」

「えっと、つまり……その率いてる霊を倒すってことなのかな？」

「目的が単純明快で有り難い。」

俺たちはそんなふうにご話をしつつ、廊下を歩いていた。幸い、まだ霊には見つかっていない。

「このまんま見つからないといいんだけどな……。」

「何ですよ？ あんたなら簡単に倒せるでしょ。ほら、いつだかの廃工場で霊手刀やら何やらやってたし。」

「あの時は……無我夢中だったんだ。俺は霊手刀なんか使えない。使えるのは、防御術である霊装だけ。あの時霊手刀なんてのが使えたのは、このコントラクト・リングのお陰だと思っぜ。」

俺がそれを言った途端、みんなの足が止まった。

「どうしたんだよ？」

「えと、悠君は送霊師なんだよね。どうやって送霊するの？」

「どうやってって……そりゃ説得し、」

「悪霊にそんな説得などという甘いことが通用すると思ったのか？」

……その時、俺はやつとみんなが足を止めている理由が分かった。要である送霊師が、攻撃的な送霊が出来ないと言っただ。驚いて思わず足を止めてしまうことも無理はないと思う。

「……悪かったっスね。どーせ俺は平和的解決しか出来ませんよー」

……。

「いじけないでよね、気持ち悪いから。それに、」

不意に、大きな爆発音がした。

「な、何だ!？」

「トラップ魔法よ。今の私には直接的な攻撃魔法は使えないけど、こんな感じで間接的に攻撃する魔法は使えるの。」

いつの間に……とも思ったが、そう言えばレンは詠唱無しで魔法を使えるということを思い出し、納得する。

そして、冷静になってから少し考えた。

罾が発動したということは、つまりは罾に掛かった者がいるということ。隼人さんたちのチームはちょうど俺たちの反対側の入り口から入ったのだから、まず隼人さんたちが掛かったという可能性は無いだろう（それに、中庭で落ち合うという約束になってるし）。

もちろん、俺たちのチームは全員いるから論外だ。となれば、残る可能性は……。

「走るわよ！」

レンのその声を合図に、一斉にみんなが走りだす。もちろん、ギルもその四本足を巧みに使い素早く走る。

「ッ！」

暫らく走り、角を曲がる所で悪霊と出くわす。

「出テイケ。コノ場所ヲ汚スナ！」

慌てて振り返り、今走ってきた道を戻っていこうとする。しかし、廊下の奥から悪霊がこちらに向かってきていて戻れない。挟み撃ちってやつだ。

さあて、どうしたものか……。

「なんだ、今の音？」

俺は浩樹と亜紀の二人に問い掛けた。

「なんか爆発したみたいだな。」

「あっち側に何かあったのかしら……？」

悠たちが心配になってきた。あいつらは大丈夫だろうか？ さっ

きの爆発音は一体……。

しかし、そんなふうには悠たちを心配してる場合ではなかった。

「排除スル。排除スル。」

「此処ハ“シルバクア”様の聖域ダ。立ち去レ！」

そう。いつの間にか悪霊達に囲まれていたのだ。まったく、何処から湧いてきたのか。つーか、シルバクアって誰だよ。ま、そのシルバクアって奴がこいつらを率いてるってことが分かっただけでよしとするか。

「みんな、準備は出来てるな？」

「本当に俺の拳でも攻撃が効くのか……？」

「論理的にはね。でも、今は無理でもやるしかないでしょ。」

「……確かに、その通りだな！」

浩樹も納得したところで、俺は胸元にしまっておいた銃を取り出し戦闘態勢をとった。

「さあ、悪霊ども。俺の霊銃……武獲たけみかの威力、その身で受けてみる！」

## 第11話 交戦開始（後書き）

今回は比較的短めの話なのに更新が遅くなってしまいました……。まあ、これでも自分は受験を控えた学生の身分なんです。察していただけるとありがたいです。

## 第12話 謎の計画

廊下の右側の敵を俺が。左側の敵を浩樹が担当し、亜紀は真ん中で呪文詠唱で後方支援。まさに最高の陣形だ。

「生憎と時間はそんなかけてらんないんでね。ちゃちゃ〜と終わらせちまうぞ。」

俺は武甕の引き金を引き、悪霊達に向けて発砲した。

勿論発砲したのは実弾ではなく、霊のみに効く霊圧弾だ。

発砲した時の音というのはつまらないもので、よく刑事ドラマとかであるような、あんな大きく激しい音はしない。大雨が降っていたら、その音に混じって消えてしまっただけの発砲したときの音と小さいものだ。

……いや、そうでない銃も沢山あるのだろうが。少なくとも、手持ちサイズの銃では殆どそんなものだろう。

「……ん？」

継続して撃ってはいるが、やはり仕留めそこなう場合もある。

ふと奥の方を見ると、その仕留めそこねた悪霊達が集まり、一つの巨大な霊になるうとしているのが分かった。

「へえ……。なかなか面白いことしてくれるじゃないの。」

武甕に霊力を込め、リロードする。それを悪霊の集合体に向けて撃つ、撃つ、撃つ。

「ウウ……。痛い痛い、止メロ！」

集まったところで大して変わったもんでもないのだろうか。攻撃がかなり普通に効いている。

さて、とつと決めてやるか……。

精神を集中。武甕に霊力を込める。狙いも……よし。

「黄泉へと逝け。」

そう言った後、武甕から放たれた弾は真つすぐ悪霊に向かう。そして気が付けば、いつの間にかこちら側の霊達はいなくなっていた。

「俺の相手をするにはまだまだ、だな。」

その時、俺のすぐ後ろに気配を感じた。

慌てて前へ向けて体を動かし、背後にいるであろう敵と間合いをとり、その後方向転換を。

「オオオオオ……！」

この至近距離だ。銃で戦うには明らかに不利と判断したのだろう。なかなか賢い霊もいたものだ。

……いや、おそらくそんなことを考えて行動しているわけではな  
いかな。

「お前、銃が接近戦に向いていないとでも思ったか？ なら、それは大きな間違いだったの。」

武甕を構え、まるで短剣を扱うかのようにして敵を斬る。

霊は斬られると、煙のように消えた。まあ、そういう加工をした刃だから当たり前なのだが。

「銃剣つてもんがあること、ちゃんと学習しとけ。」

不意打ちだから少し期待したのだが……。やはりこいつも、俺と戦うに相応しい相手じゃない。弱すぎる。

一つ溜息を吐くと、俺は浩樹の手伝いをしに向かった。

夕闇に響く、ガチャガチャと錠前に鍵を無造作に挿し込む音。そして、ジャラジャラと鍵束の鍵がぶつかり合う音が煩くてたまらない。

「開かないの？」

「うっさい糞兄貴！ 今やってるだろ！」

「智……学校にいるときの性格を維持してくれよ……。」

何だつて？ 性格が変わらない方が可笑しいだろつてんだ。兄貴は少し、宝月家の後継ぎ候補だということの自覚を持った方がいい。「シツ……黙つてる糞兄貴。」

不意に物音が聞こえた。ここには隠れる場所が無いので、小さな物音にでも敏感に反応しなければ……大変なことになる。

周りをよく確かめ、兄貴以外いないことを確認すると、私は再び扉を開けるために鍵を挿しては抜く作業を繰り返す。

糞つたれ……。こちらら、あまり時間が無いつてのに！

鍵束の鍵は全部で12個。6個で当たりができれば、幸運と言えよう。けれども、私は今8個を既に試している。

「ああ、もう！ 本当は当たりの鍵なんて無いんじゃないの！？」

「あ、あまり大きな声を出さないほうが……。」  
文句を言いながらも次を試す。

錠前に鍵を挿し込み、ねじる。

「や、やつぱりこんなこと止めた方が……。犯罪だよ、こんなの。」  
「うっさいよ！ 本家からの命令を無視するつてことは、どういうことになるか分かつてんの！？」

言いながら、次の鍵を試そうとする。しかし、焦ってしまい手がうまく動かない。

くそ、くそくそくそつ！ なんで開かないんだよつ！ あともう5分と時間が無いつてのにさ！

その時、汗で手が滑り鍵束が地面に落ちる。

ここはコンクリートで出来ているから、落ちれば激しい轟音を鳴らすだろう。そうなれば私たちはアウト。今日は偶然（事前に調査したから、偶然とは言えないかもしれないが）にも警備がいつもより薄いから、鍵束を盗みこの倉庫まで辿り着けたが、それでも警備が通常よりしっかりしていることには変わりないのだから。

しかし、予想に反して轟音は鳴らなかつた。

「ふう〜……危ない危ない。」

「……たまには役に立つじゃない、兄貴。」

兄から鍵束を受け取ると、私は次の鍵を試す。ちゃんと印をつけてあるので、さっきのことでどれを試したのか分からなくなっただけではない。

差し込み、ねじる。すると、グリツとした手応えが。……よし、開いた！

扉を開け、内部に侵入。さっさと任務を済ませようと、目的の物を探す。

「何を探すんだっけ……？」

「GHプロジェクト……。いや、私たちが探してるのは今よりちょっと古い時代のだから……。人体と霊体の融合化計画、に関する資料ね。……ほら、あつたあつた。」

目的の物を見つけ、その場から早く逃げようとする。

しかし、外に出て見た光景はそれを諦めさせるようなものだった。

「そこまでだ、宝月！」

倉庫の周りを囲む人、人、人。見れば、こちらに銃まで構えている。

「……成程。初めから気付いてたのね。」

後ろにいる兄貴に指でサインを送り、同時に資料も渡す。

「安心しきつた所を狙わなければ勝算は無いと思っただけだから。それに、逃げ場を無くすという利点もある。」

言われた通り、私たちはまだ倉庫の中（正確には入り口付近）だ。逃げることは絶対に不可能。……やられたなあ。

「で、私たちから何か聞きたいの？」

「何故、そう思う？」

「銃、まだ撃たないから。」

「ご名答。では聞くが……宝月家は何故、旧岩崎本家を狙う？」

少し悩む。そんなこと、私にはよく分からないからだ。でも、これだけは言えた。

「計画だよ。あんたたちには、銀の水計画って言ったほうが分かりやすいかな。それに関することさ。」

「それと旧岩崎本家が何故関係すると？」

「とぼけちゃって。ダメだよ、そーゆーの。私たち、岩崎悠がNG  
Hだったこと知ってるんだから。そして、岩崎悠の誕生の影に旧岩  
崎本家が関わってたことも。」

それを言つと、暫らくあいつらは黙り込んでしまった。そして、  
沈んだ声であいつらは私たちに聞く。

「何故、それを……。」

「それは……。」

不意に、兄貴が背中を軽く叩いてきた。

「あんたたちに言つ必要はないよっ！」

私は、倉庫からあいつらに向かって飛び出した。

### 第13話 狂気

「佐藤さん、向こうお願いします。俺とレンはこつちを。渡辺さんは……。」

「うん、私はここで待機してるよ。」  
「そう言っつて二手に別れる。」

「どうすんの？ あんた、戦えないでしょう？」  
「戦えないわけじゃない。」

自らの体に霊装を施す。

「奴らの体に手え突っ込んで俺の霊力を流して、奴らの霊力と…相殺させる。」

「そんなこと出来るの？ まあ、確かにそれなら奴らを消せるけど……超接近戦になるわよ。」

「分かってる。」  
「言った後、走りだす。ああもう、今日は厄日だなあ……。」

「アアアアアア……。」  
「うるさいなあ……。でもまあ、そんなてめえに俺からの、」

右手に意識を集中。青白く光るまでに霊力を右手へと流す。そして、悪霊の体に向かって手を突っ込む。

「プレゼントだあっ！」

俺の体をどつと疲労感が襲う。しかし、手応えはバツチりあった。見ると、悪霊の形態が著しく変化して、暫らくすると煙のようなものを出しながら消滅した。

「やるじゃない。」  
「ははは……。まあな。」

レンに向かって笑ってみせるが、本当はあまりそんな余裕は残っていない。

「これは……。うん、間違いなく……。お父さん。」

渡辺さんが何か可笑しな事を言っているが、対応する余裕は全く







## 閑話

「アル！ アルはいませんか！？」

レンに瓜二つの容姿をした、しかしレンと比べると明らかに身長が低いであろう少女が、どうやら誰かを呼んでいるようだった。

「お呼びでしょうか。」

アルと呼ばれたその年寄り、どうやら彼女の執事のようなものらしい。

「レンは何処に行ったのでしょうか。」

「レンお嬢様の居場所は既に確認されております。」

「ならば話は早いです。それは何処ですか。」

アルは言うべきかわざるべきか迷っていたようだが、やがて重い口を開き言った。

「地球です。その中で、ええ……確か、日本の嶺山町ではなかったかと記憶しております。」

「何故そんなところにレンが……、」

一人でそんな所へ行ったレンを咎めようとしたのだったが、自分にも思い当たる節があるのだろうか。最後の、レンを咎めるための一言は出てこなかった。

「レンお嬢様がアリアお嬢様に似ているのは容姿だけではないと。」

そういうことではないでしょうか。」

「言ってくれますね。まあ、否定はしません。」

アリアと呼ばれたその少女は、過去にこのようなレンと同じ行動をとったことがあるのだろうか。

……この姉妹には、謎が多すぎる。

謎について小さなことから大きなことまで言い尽くせば限りがないが、ここで一つ容姿と歳に係る謎を言おう。

先程も言った筈だが、アリアはレンと比べて明らかに背が低い。しかし、それなのにアリアは姉であり、レンはその妹である。歳の差は一歳だとか。

「アル。私も地球へ……嶺山町へ行きます。」

アルは、アリアがそう言うことをある程度予想していたのか、それほど驚いた様子は無かった。

「用意は出来ております。」

アルがそう言った後杖を振ると、巨大な魔法陣が出現した。

アリアはその魔法陣の上に乗し、瞳を閉じ意識を集中させる。

淡い光が周りに漂い、アリアのその長いスカートはひらひらと小さく動く。目に見えない力に満ち溢れたその光景は、不思議としか言いようが無かった。

そして、唐突に閉じた瞳を開いたかと思うと、次の瞬間には口を開きこう言った。

「ジャンプ！」

刹那、目を開けていられない程の明るさを持つ光が出現し、その光が消える頃にはアリアはいなくなっていた。

「……お気を付けて。」

20XX年8月25日。

今日は、彼らが部活（いや、あれは部活と言えるものだろうか）であの病院に行くらしい。……くだらないなあ。

まあ、お陰で実験体の成長を促進させているのであれば、決してくだらないことにはならないが。

仕掛けは上々。促進させるには充分……いや、実験体を殺してしまっただけでは無いだろうか？

その辺りは柏木やら春日やら佐藤……特に高梨に期待させてもらおうか。精々、実験体が殺されることのないように頑張っしてほしい。さて、私もそろそろ動こう。あちらのことは全てシルバクアに任せてあるんだし、私がそこまで心配しなくても……おそらく大丈夫だと思う。

……今日は本当に、忙しい日だ。

8月24日・x x 宅

小型の携帯電話が静かなこの部屋に鳴り響く。私の携帯電話だ。

「……もしもし。」

組織の者からの電話だった。

「え？ あ、はい！ 順調ですよ。」

どうも、任務に関係した話らしい。しっかりと様子を見るように、とのことだ。

「お父さんと彼は……似てるんですよ？ それだけヒントがあれば大丈夫ですよ。」

お父さんに似ているなら私分からないワケが無い。

……もうお父さんはこの世にいないけど、だからこそ彼がお父さんに似ていればすぐに分かる気がする。いや、絶対分かる。私はあの人が……好きだから。

「……分かってますよ。私情は持ち込みません。私、プロですからね。ええ。」

その後は任務とは関係の無い雑談をした。暫らくして、唐突に向こうが重要なことを言いだしてきた。

「……明日ですか？ はい。しっかりと監視します。8割方そんなる予定なら、おそらく外れるなんてことは無いでしょうから。んで、予定通りなら“あれ”を使用します。では。」  
そう言って、私は電話を切った。

## 閑話（後書き）

久しぶりの更新です。

今回の話はどうでしたでしょうか？

## 第14話 解かれた記憶

「ぐうっ……！」

「あっははははははは！」

ギルは俺の攻撃を受け、小さく呻いた。

「悠……お前は本当に可笑しくなってしまった。我が有する特殊な力を忘れたか……！」

途端に、ギルの体がどんどん大きくなり、あっという間に虎程度の大きさになる。

「目を覚ませ！ 力に支配されるな、悠！」

ギルのその言葉でハツとする。

そう。こんなことをしている場合ではないのだ！ 力をぶつけるべき相手はギルではなかったのだ！

方向を変え、奴らの側を向く。

「悪かった、ギル……。謝る。」

「気にするな。我に貴様程度の攻撃など大したこと無い。」

「……そのうち礼をさせてくれよっ！」

俺は先程ギルに放ったものと同じものを向かってくる悪霊へ放つと、奴らは低い呻き声をあげて消滅した。

「……はあ………はあ………。」

とりあえず雑魚は片付けたが……おかしい。左目が痛まなくなったら急に……くっ……力が、出てこなく……。

パンツ、パンツ、パンツ！

その時、何かが俺たちに向かって放たれた。

「今のは威嚇。とつとと帰らないと……、」

突然に現われた銀髪の少年は両手の指と指の間に、計八発の黒い玉を挟む。

「死ぬことになるよ。」

その場に重い沈黙が流れた。

そして、その沈黙を破つたのは意外な人物であった。

「こちらW33！ お願いします、Gシユナイダーの使用許可の承認を！」

……え、何で××××がこんなこと言ってるの？

これが、俺の薄れていく意識の中で最後に考えたことだった。

「おおー……浩樹もなかなかのもんだな。」

まあその、マキシマムバスターとかいう技名はどうかと思うが。

「伊達に魔人間やってるわけじゃないからな。」

「へえ……。」

言いながら、戦闘不能状態の悪霊共に止めをさす。送霊師じゃないと止めがさせないって……凄く面倒だ。

まあとにかく、こちら側は済んだのだ。中庭に集合の予定だったが……あちら側に加勢すべきだろう。

「それじゃあ、早く向かいますよう。」

亜紀も賛成していることだし……急いで加勢しよう。

俺たちはさっさと悠たちのもとへ向かっていった……。

4月15日・???

「ふう……。」

あそこではアルに言われて淑やかにしていたが……やはり私はこの喋り方が一番いい。

それにしても、少し移動する場所と時間を間違えてしまったようだ。おまけに、少し記憶が曖昧だ。私は……あれ？

私は……誰だっけ？

妹を追って地球に来たのは分かる。アルのことだって覚えてるし、魔術とか剣術、体術だって。なのに、自分のことが思い出せない……？

その時、路地裏で銃声が聞こえた。

「何だ……？」

こんな夜中に……とても怪しい。行ってみよう。

……

「借りたもん返せよ……なあ、佐々木組のコジロー君？」

「まだ組の再興とか考えてんの？ ははは、一人で何が出来るんだか！」

「しかし、たった一人なのに組を名乗るなんて……笑いが止まらないねえ！」

ふむ、どうやらあの、金色の短髪でなかなか格好良い容姿をした青年がどこぞの組の奴らに絡まれてるらしい。多勢に無勢……なんと卑怯な。

……それにしても、あの青年の忍のような姿が気になる。あれは何だろう。コスプレ……とかいうやつだろうか？

とにかく、考える前に行動だ。

私は自分の“金色”の長い髪を束ねて、ポニーテールのようにする。……何故か懐かしい。

それより、私の髪は金色だったっけ？ 分からない……。でも、とにかく今はあの青年を助けなければ……！

……

「ほら、その刀。そいつを売れば結構な金になると思っただよなあ」

「……！ これだけはダメだ！ これは、姐さんの……、」

「黙ってるよ。ぶちまけられてえか？」

奴らが一斉に俺へと銃口を向ける。

くそ……くそおっ！ 俺は姐さんのこの剣をこいつらに渡す

しかないのかよっ……！

その時。

「な、何だお前は！」

突然俺の前に舞い降りてきた、誰か。

「……貴様等に名乗る名前などないっ！」

その姿は凛々しく、格好良くて。着ている衣装はあの頃とは違うけれど、その姿はまるで……

「姐さんっ!!」

**第14話 解かれた記憶（後書き）**

リハビリで書いたような話。

出来は今ままで一番悪いです……。

## 第15話 再興の刃

「姐さんっ!!」

「お前、佐々木組の再興を目指すと言ったな……、」

目にも止まらぬ速さで動き相手を翻弄する。一見するとただ移動しているだけにしか見えないが、次々と倒れていく組員たちを見るかぎりそうとは思えない。

「ならば私が、」

足を止めた姐さんに向かって、組のリーダー格の野郎が銃の引き金を引く。それから放たれた弾丸を姐さんは指と指の間で“取った”。

「佐々木組再興の、」

取った弾丸を掴み、奴に向かって投げる。……いや、あれは“投げる”とは言わない。“撃つ”だ。

弾丸は奴の肩に直撃し、奴は声にならない声をあげて逃げ出した。「刃となろう!!」

満面の笑みでこちらを見つめる姐さん。

……ああ、やはり俺はこの笑顔を知っている。

「ね、ねねね、ねねねねね……、」

「うん？」

「姐すうわあああああんっ!!」

姐さんに抱きつき、その胸の中で俺は思いつきり泣、

「ね、姐……さん？」

「こ……こっ……この……」

上目遣いで姐さんの表情を窺ってみる。なんか体が小刻みに震えてんですけど……。

「あ、あのー……姐さん？」

「……こおんの破廉恥がああああっ!!……!!」

まるで漫画のように飛ばされる俺。

ああ、姐さん。俺は姐さんが武道家として……そして女としても成長していて、凄く……嬉しいです……。

「……すまなかった。だ、だが、お前だつて悪いのだぞっ!？」  
「わかつてます。反省してます。今後は自重します。ついでに、住居がこんなボロアパートでごめんなさい、姐さん。」  
「お前が変なことさえしなければ他は構わない。それよりその……姐さんとは何だ?」

先程から気になっていたことを聞いてみる。

……しかし不思議なものだ。何故かその……“姐さん”と呼ばれると懐かしいものを感じる。何故だろう。

「あの……え、その、新しい冗談ですか?」

「冗談ならば良いがな。自分の名すら思い出せない。」

「うわぁお……冗談キツイっすよ。あ、俺の名前! 俺の名前分かりますか!？」

こいつの名前? 何故そんな簡単なことを……。

そんな小さな疑問はあつたが、とりあえず答えてやることにする。

「コジロー……でしょ?」

「ああ、そうですね……まあいいですが。」

「ええっ!?! ち、違うの?」

その後何度も尋ねたが、コジローはそれをはぐらかせてばかりで明確な答えは言わなかった。

「それよりですね。」

不意にコジローが言った。

「こんな男と一緒に住むだなんて、いいんですか?」

「お前にそんな甲斐性は無いだろう?」

私がそう言うと、「やっぱり姐さんだ」と笑った。

どうもこの男、私を相当知っているようだ。ならば、私の名も知

っている……？

「なあ、コジロー。」

「何でしょう。」

「私の名を知らないか？」

コジローは一瞬表情を渋らせたが、その後馬鹿みたいに明るい顔で答えた。

「姐さんは、ハルカ姐さんです。……ハルカ姐さん、なんです。」

何故だろう。少し自分に言い聞かせているように聞こえたのは気のせい……か？ 私に何があつたのだろう……。

「姐さんは、何を覚えてます？ 殺された……いえ、殺されかけたことは覚えてます？」

「……すまない。私は何も……。」

「仕方ないですね……じゃあ今日、俺がしっかりといろいろ姐さんに教えますよ。でもその前に、」

そう言つて、あの時組の奴らに取られそうになつた剣を私に手渡す。

「これは佐々木組伝統の秘剣……“鎌鼬”。姐さんの愛用していた剣です。どうぞ。」

私は暫らくの間それを眺めてみる。

既視感？

私はこの剣を……見たことがある。でも、それを思い出せない……なんてもしかしいことだろうか。でも……。

「この剣に封じられてる強い風のパワー……。」

「姐さん。この剣のことは……覚えてますよね？」

「覚えてる……と思う。この力を私は……感じたことがある。」

嘘ではない。たぶん私は今すぐにでもこの剣を……使い熟せる。

「コジロー……少し手伝え。」

「え、何を……？」

「手合せ願いたい。」

「姐さん……はい、喜んで！ 俺、姐さんになら一生お供致します

よっ!」

「コジローのその言葉がとても嬉しい。私は昔からこんなに慕われていたのだろうか? それが分からないのが非常に残念だ……。」

「……ありがとう。だが少し照れ臭いぞ……馬鹿野郎。」

「馬鹿で結構です。姐さんに仕えられるなら。」

「コジロー……。」

さっきからこいつは……こんな恥ずかしい台詞をよく言えたものだ。ほんとに……困る。

「ところで姐さん。」

「なっ……どど、どうしたコジロー?」

「今回、俺たちだけで話を進めましたが、これでは主人公が全く出てこ……はっ!?! もしかして、俺ってば第二の主人公じゃないですか!?!」

「……はあ?」

「いや……ちょっとしたジョークです、はい。すみません……。」

……蛇足。

## 第15話 再興の刃（後書き）

応援・批評・アドバイス、何でもお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7608a/>

---

悪魔といっしょ！

2010年11月12日11時23分発行